

内容重視型漢字学習素材の開発

Development of Content-based Kanji Materials for Intermediate-Advanced Learners of Japanese

小林由子 (北海道大学)

KOBAYASHI Yoshiko, Hokkaido University

Abstract: Intermediate-advanced learners of Japanese need to utilize their kanji knowledge for reading, and this require retrieving them in context. Content-based kanji materials are necessary for this task, because they make learners process kanji deeply. This presentation aims to introduce class work using content-based materials for kanji learning and suggest using them on computer system. Learners have different interests, levels and weak points and computer associated content-based materials are able to meet various learners' needs. How to implement them in the most efficient manner will be discussed in the poster session.

キーワード：漢字 内容重視型教材 中上級学習者 語彙学習のための「読解」教材

1 はじめに

漢字学習の大きな目的のひとつとして、「日本語のまとまった文章を読んで情報を得る」ことがある。一方、中上級日本語学習者の漢字学習上の問題点として、「忘れやすい」「実際に使えない」ことが挙げられる。その大きな要因として、学習場面において「深い処理」がなされないことと、実際の漢字使用と結びつかない形で学習がなされていることが考えられる。

そこで、本発表では、まず「読むという行為のなかで実際に漢字知識を使う」ための学習素材を提案する。これは、中上級学習者が「漢字を含むまとまったテキストを読める」ことを目標とし、文章を読むことによって、従来の「内容理解を中心とした読解」ではなく「漢字を使った語彙」を学習する、いわば「語彙学習のための読解教材」である。

さらに、本発表では、このコンテンツをコンピューター・ベースで学習するための要件および留意点について議論する。筆者の実践は教室での一斉授業として行ったが、この型の教材はコンピューター・ベースで展開することが望ましい。なぜなら、学習者のニーズ・レベルは異なっており、データベースの中からニーズに合ったものを選び学習することが必要であると考えられるためである。

以下、本稿では、「内容重視型漢字学習教材」の概要、コンピューター上で運用するための要件について述べる。

2 中上級レベルにおける「読む」ための漢字教材の必要性

漢字学習でもっともよく行われているのは「漢字熟語にふりがなをつける（以下「読み練習」）」「読み方に対応する漢字を書く（以下「書き練習」）」という活動である（小林 1998）が、学習者によっては「個々の漢字は知っているが、熟語の読み方・意味がわからない」

「熟語にふりがなはつけられるが、熟語を含んだ文章を読むことができない」という現象がしばしば生じる。

これは、意味を伴った「深い処理」や、「読む」という行為の中で漢字知識を使う訓練がなされていないためである。Craik & Lockhart (1972) の「処理水準モデル」では、新しい情報が既存知識とより多く結びつけられる「深い処理」がなされた方が単語の記憶成績がよいとされる。また、Morrisら (1977) は、実際に使う（検索する）知識が、音韻・字形などの場合は、それに合った符号化（音韻手がかりなら音韻、字形手がかりなら字形）をしたほうが成績がよいことを示し、これを転移適切性と呼んでいる。

「読み練習」「書き練習」は、漢字の形と音を結びつけるという「浅い処理」であり、漢字の形と意味を結びつけるという「深い処理」を保証しない。また、実際にまとまったテキストを読む際には、その中で字形から語彙の意味を検索しなければならないが、「読み練習」「書き練習」は、漢字の「形から音」または「音から形」を検索する活動であるため、「まとまったテキストを読む」ために必要な意味の検索を保証しない。さらに、一つ一つの漢字の形・読み方・意味を覚えていくタイプの学習方法をとった場合は、漢字が、文中で使用する「語彙」としてではなく、分離した個々の文字として処理される可能性があるため、語彙としての検索が困難になる可能性がある。

漢字を学習し始めたばかりの学習者や漢字使用に困難を感じる学習者は、注意資源を形態認識などに配分しなければならず、「深い処理」は認知的負荷が高いために負担を感じる場合もある（小林 2006）。しかし、形態認識や基本的な意味処理、文の処理などが自動化している中上級学習者は、初級学習者に比べて、まとまったテキストの中で漢字を語彙として処理することに注意を向けることができる。また、それぞれのニーズに応じて漢字を含む文章を読む・書くことが必要な学習者が多く、実際にまとまったテキストの中で漢字語彙に関する知識が使えるようになるための学習活動が必要となる。

3 「内容重視型漢字学習教材」の概要

「内容重視型漢字学習教材」とは、学習者が関心をもつジャンル・内容の読み物に含まれる高頻度の漢字語彙およびその関連語彙について、同義語・反意語・共起・語構成・類義語との使い分けなど、意味処理を主眼とした活動を通じて「深い処理」を行うことにより、漢字の運用能力を高めるものである。

教材はトピック別で、以下の構成要素からなる。

- ・ 漢字語彙を含む読み物
- ・ 語彙リスト
- ・ 練習問題
- ・ クイズ

「読み物」は、400 字前後で、漢字語彙を豊富に含むまとまった文章である。漢字語彙の処理以外には注意資源をあまり要しないよう、長すぎず、複雑な構文・文法事項・テキスト構造を持たず、語彙がわかれば内容がわかるような文章でなければならない。また、その内容は、学習者が興味を持つトピックについて新しい情報を含むことが望ましい。

「語彙リスト」は、学習項目である漢字語彙と読み方を示したものである。教室での一

斉授業の場合は、事前に語彙を調べることを事前タスクとして課したため「読み方」のみを提示したが、学習者の母語または理解可能な言語で意味を提示すれば、学習者の負荷を減らし、より多くの文章を読み学習語彙を増やすことができる可能性がある。

「練習問題」は、文章に含まれる漢字語彙の同義語・反意語、類義語との使い分け、その漢字語彙と共起する語彙、読み方を含む。従来の漢字教材では重視されることが多かった「読み方」の優先順位が低いことが特徴である。

「クイズ」は、「練習問題」で学習した事柄を確認するためのものである。

4 「内容重視型漢字学習教材」による教室における実践

筆者は、上記のような教材を作成し、教室での一斉授業の形で実践を行った。期間は2006年4月～8月の15週間および同年10月から2007年2月の15週間の計2期、授業時間は1週間に1回90分、対象者は、大学・大学院レベルの留学生で中級後半レベルの日本語学習者15名前後である。このクラスは大学の日本語補講コースの一環として行われており、学習者のクラスレベルはプレースメントテストと下のレベルからの進級状況により決定されている。学習者の専門分野は文学・政治学・工学・農学など様々である。

教材は、第1期は『Intermediate Kanji Book vol.2』（加納ほか 2001）の分類を参考に、政治・経済・コンピューターなどジャンル別に作成し、学習者の希望が多いジャンルから順に採用した。課題は、新聞や『朝日キーワード 2006』（朝日新聞社 2005）などから選んだ文章を筆者が改変したものである。また、第2期は受講者の希望が「ニュース」に集中したため、新聞のニュース記事をもとに「科学」「事件」「経済」「政治」などのトピック別の教材を作成した。

1回の授業は「前回のクイズ」「テキスト」「練習問題」で構成され、90分でひとまとまりとなっている。学習した語彙は1回当たり30～40語で、日本語能力試験2級レベル・1級レベルの語彙が大部分を占めた。

このような教材を使った授業の利点は、「漢字を含むまとまった文章を読み情報を得る」という漢字学習の目的にかなった活動が実際の使用文脈での漢字知識の運用を促し、学習者の意欲が高まったことである。また、文章の中に埋め込んで漢字語彙を提示することにより、その語彙の意味・共起する語彙・類義語との使い分けの理解が容易になった。一方、学習者によって、関心を持つジャンル・トピック・弱点・日本語能力がそれぞれ異なり、個別対応ができないことが問題となった。

この問題点を解決するためには、教材をコンピューター上で展開し、個人差に応じた学習を行うことが必要である。

5 コンピューター化のための必要要件

コンピューター上で展開する「内容重視型漢字学習教材」が学習者の個人差に対応するためには、以下のような要件を満たす必要がある。

- ・ 学習者がトピック・レベルなどのニーズに応じて教材を選択できること
- ・ 同意語、反意語、共起語のような学習活動を選択できること

また、コンピューター上で教材を展開するためには、以下のような支援が必要となる。

- ・ 文章に含まれる漢字語彙の読み方と意味の提示
- ・ 練習問題の解答、および関連知識の提示

したがって、コンピューター上で展開する「内容重視型漢字学習教材」は以下のように構成される必要がある。

- ・ 学習者がメニュー画面からトピック・キーワード・学習語彙によって課題を選択する。このトピック選択方式としては「経済」のような上位カテゴリから「バブル崩壊」のような下位カテゴリを選ぶ形式、頭文字順のキーワードからトピックを選ぶ形式、学習漢字から選ぶ形式などが考えられる。
- ・ 課題を選択した後、漢字語彙を含むテキストを提示する。学習者の知らない語彙については、必要に応じて「読み方」「意味」が提示される必要がある。
- ・ 学習者がテキストを読み、漢字語彙の読み方と意味を一通り理解した段階で、演習を行う。学習者が解答を入力した後、解答と解説を示す。教室での実践では解答は記述式であるが、コンピューター上では択一式の解答方法が適切である可能性がある。
- ・ 学習者の学習スタイルによって、提示形式を選択可能にする。すなわち、場面依存型の学習者には先に文章を提示してから演習を行う形式、場面独立型の学習者には先に演習を行ってから文章を読む形式が適する可能性がある。

6 今後の課題

以上のような教材をコンピューター上で展開するためには、まず第一に、コンピューター上にも実装し、どのようなシステム・インターフェイスが適切であるかが検討される必要がある。そして、そのシステムによって試行的な学習を行い評価・改善を行う必要がある。同時に、学習者の多様なニーズ・レベルに応えるためのコンテンツを増やし、課題へのより実践的なアクセス方法が追求されなければならない。

参考文献

- Craik, F.I.M., & Lockhart, R.S., Levels of Processing : A Framework for memory research. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 11, pp.671-684 1972
- 加納千恵子ほか 『Intermediate Kanji Book vol.2』 凡人社 2001
- 小林由子 漢字授業における学習活動-認知心理学的モデルによる検討, 『北海道大学留学生センター紀要』, vol. 2, pp. 88-102, 1998
- 小林由子 認知心理学的視点, 青木直子ほか(編)『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社, pp. 56-71, 2001
- 小林由子 学習者の認知プロセスを考慮した漢字教材の開発, The Third Conference on Japanese Language and Japanese Language Teaching ; Proceedings of the Conference, Rome, 17-19th March, 2005, Associazione Italiana Didattica Lingua Giapponese, pp. 251-270, 2006
- Morris, C.D., Bransford, J.D., & Franks, J.J, Levels of processing versus transfer appropriate processing. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 16, pp.519-533 1977